



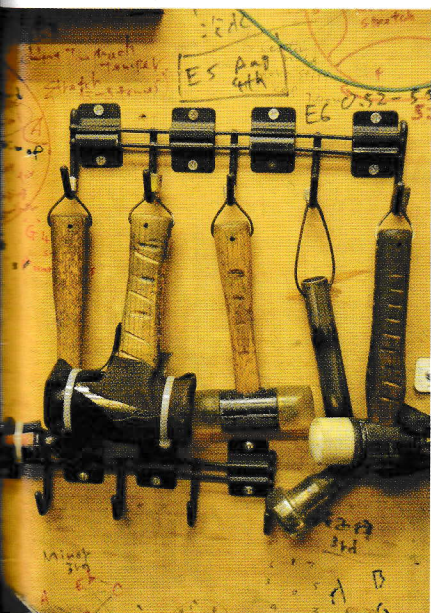
エアハンマーで鉄板を叩く

うで、激しく私の耳朶を震わしました。背筋がゾクゾクして最後まで聴いていられないほどの感動を覚えました。そのレコードのジャケットには、古びた円筒形の鍋をスティックで叩いている写真が載っていました。

### トリニダード・トバゴへの旅

この日が私とスティールパンとの出会いの日となりました。

その日から約二年後、いい知れぬ焦燥感や苛立ちがピークに達し、一度リセットをするという意味で休学届けを出し、アルバイトでためた五十万円を手に、思い切ってスティールパン発祥の地であるカリブ海のトリニダード・トバゴ共和国に出



楽器づくりは繊細な技術を要するため、道具にもこだわりを持っている

掛けてみることにしました。日本からアメリカ経由で二十数時間、初めての海外旅行にしては長い旅程でしたが、何とか無事に着きました。着いたものの、当時はインターネットなどなかったもので全くと言っていい情報がなく、安い宿を探しては転々とするという旅になってしまいました。スティールパンの製作現場やスティールバンドの練習場などを訪れる機会はありませんでしたが、とにかく見るもの聞くもの食べるものなど全てが新鮮すぎて、南国特有の開放的な人間性にも触発され、毎日が瞬く間に過ぎていってしまいました。当初はスティールパン製作を学びたいという気持ちもありましたが、安宿を求めて転々としていたので、ついでに叶うことはありませんでした。帰国予定の前日には、街の中心部で政治的暴動が勃発し、近くの島に脱出するといったハプニングにも見舞われました。

何となくその技を学びたい、という思いで数々の製作者の工房を訪ね歩きましたが、よそ者には絶対に技を教えない、と何度も断られました。何軒か回ってやっと「見るだけなら来てもいいぞ」という人に出会いました。その日からは毎朝早くからその工房に通い、ひたすら手元を見続ける日々が続きましたが、何をやっているか、さっぱりわかりません。そのチューナー（調律師）が昼飯を食べに出ている間に、工房に半ば捨ててあったスティールパンをいじっては見よう見まねでチューニングを試みてみました。音が出来ては壊し、また次の昼休みに再度チューニングをすることを繰り返していたら、何となくチューニングの方法が解ってきました。その当時は、この楽器は職人の勘で作るものだと思っていましたので、自分にはスティールパンを作るセンスがあると思いつ込んでしまい、お金が尽きてきたこともあって帰国の途に着きました。

帰国後、ガソリンスタンドでドラム缶を調達しては、スティールパン作りを試みましたが、形は作れるものの音が一向に出て来ません。これは材質の問題なのかもしれないと思いつめてしまいました。何度やっても結果は同じで、私はすっかりふさが込み、いわゆる引きこもり状態になってしまいました。そんな苦しいときに起死回生の思いで始めたのが輸入業でした。作れないのであれば既製品を輸入して自ら販売しようと考えたのです。

開業の翌年、某公立高校吹奏楽部から大量にスティールパンを買い取ったという注文が入りました。何とか三カ月後に納品しましたが、ふたを開けてみるとなんと三割の商品が不良品でした。即、交